

パラリンピックという夢
—「不可能性の時代」の身体論／東京2020から発信するスポーツの価値について—

The Dream in Paralympics:
On the Body in “the Era of Impossibility”/
The New Value of Sports and Society from Olympic Games 2020

中江 桂子*
Keiko Nakae

Abstract

The aim of this paper is to sketch the form of sports and body culture in contemporary era keeping distance from modern ideology, and to propose its value. Tokyo Olympic in 1964 was an event symbolizing Japan's years of hope, which supported the high economic growth. In contrast, we are in “the era of impossibility”. What sort of social transformation can the Tokyo 2020 Olympic Games bring about?

In order to answer this question, first of all, we examine the Norbert Elias thesis which discussed the concept of balance between excitement and suppression and the social function of sports. And now, at the epidemic of cynicism, it is argued that it is difficult for us to feel excitement and to acquire sense of existence in society. Secondly, I discuss body theory, especially from the perspective of the body-technology relationship, and from the perspective of others theory in body. Today, it is assumed that the body is surviving along with technology as foreign substance, and that the body inevitably coexists with others who can't predict and can't understand. I draw out the image of the body that continue to maintain social relations with foreign substance and foreign people in a diversified society.

Finally, as you live with foreign substance and foreign people, the body embody a sense of rhythm and gliding, and this new body image forms the basis of contemporary body culture. I will clarify that this body culture that internalizes rhythm and gliding sensation present the new possibilities of the Olympic and Paralympic Games and Society.

1. 社会学的アジェンダとしてのスポーツと現代

ノルベルト・エリアスは、『スポーツと文明化』のなかで次のようにスポーツと文化の根源的問題について語っている。

* 明治大学文学部教授 Professor, Department of Literature, School of Art and Letters, Meiji University
Email: nakae@meiji.ac.jp

文明化の過程を経ている社会が直面していた重要な問題の一つは快楽と抑制の新しいバランスを発見するという問題であったし——今でも相変わらずそうである。人々の行動を規則的に抑制する手段の漸進的強化、それに対応する良心の形成、生活のあらゆる領域をさらに細かく規制する規則の習得は相互関係にある人々により多くの安全と安定性を確保してくれるが、それはまた、より素朴で、自発的な行動様式に結びついている楽しい満足の喪失をとまなう。スポーツはこの問題の解決策のひとつである（エリアス1995：239）

社会の中に暴力と抑制のバランスをどのように作り上げるかという課題は、いつの時代も社会にとって重要である。エリアスはこの本のなかで、古代オリンピック競技と近代のそれとはあまりにもその様相を異にすることを指摘し、暴力という形で欲望を開放することの認められた場であった古代と、暴力を抑制しつつ実現できる枠の中の楽しみという形へと変容したスポーツの歴史を概観している。

近代以前のヨーロッパでは、まだ暴力と狂喜、死とエロスが未分化のままあまり抑制されない状態で、競技という暴力が日常的に存在していた。やがて封建領主の支配権とキリスト教の力がともに強力になり拮抗するにしたがって、領主の利益（暴力の効率的な確保と占有）とキリスト教の倫理（弱者の保護と救済への願い）を両立させるメカニズムとして、区切られた競技場で開催されるトーナメントというスポーツイベントの制度化が進められていった。競技の制度化は暴力の囲い込みを意味したが、それは当時の社会的目的にてらした規則や制限により何重にも縛られた身体によって実現されるものであった¹。現在、「スポーツ」の祖国はイギリス19世紀というのが定説となっている。産業社会の進展しはじめたイギリスにおいて、「暴力と抑制のバランス」の産業社会に適応しうるスタイルとして、スポーツが考案されたのである。その後、産業社会全体に規則性が張り巡らされるに従い、個人的な激しい興奮の条件、特に自製の喪失に至る可能性があるほどの興奮の条件は今や稀になり、社会的にもほとんど許容されなくなったことは、フーコーに詳しい（フーコー1977）。

次第に管理強化されていくうち、社会学者にとっては思い知らされているように、目的達成よりも目的までの長い道のりのなかに意味と価値をみいだすことに焦点が置かれるようになる。これがまさに近代のエトスである。スポーツにおいても、「重要なのは勝利ではなく、競技そのものに参加することである」という有名なスポーツのエトスとして近代があらわれることになった。しかし結局、このエトスは必然的に困難を抱えてしまうことになる。

「人間の最も基本的な要求のひとつと思われる楽しい興奮を、他人や自分自身の社会的、個人的な危険をとまなわせないで、また、前の時代では社会的激変、障害、人間的苦痛はもちろん、非常に楽しい満足の源でもあった数々の興奮の形態に歯止めをかけようとする良心の形成を無視して、心ゆくまで経験させられるか（ダニング1995:340）」、この問いは、より深刻なパラドックスとなり時代に現れる。

一方では、近代から現代へと移行するなかでますます熱く盛り上がるスポーツイベントからも証明されているように、私たちは抑制と興奮を安心して両立することのできると考えられる代表的な形式—スポーツ—に、ますます感情を流れ込ませていくことになる。この創出された興奮とメディアが一体化して構築される物語によって、私たちは疑似的にであれ社会的結合の力を感じることが可能になっている²。言い換えれば、あらゆる制度が人びとの自由や多様性を

¹ 暴力の制度化と抑制およびその美化にかんする歴史的経緯の詳細については別稿（中江2013b）とする。

² 祝祭とはカオスとコスモスの往復運動（リズム）によって成立し、新しい世界を支えるものである（カイヨワ1994）。スポーツの祭典は、（飼いならされた／疑似的な）祝祭といえよう。

十分に受け止めきれない現実のなかでは、「制度と感情のずれに陥っている主体は、生きているという感情の乏しさに苦しむ。これが空虚感である。この空虚感から脱出するために、主体は、生と死のリズムを直接経験することで生きているという充実感を得ようとする」（作田、2003：279）。このため興奮と抑制の交換がリズムカルに繰り返されるスポーツは、こうして、私たちにとってますます必要なものと認識されてくることになる。

ただし他方では、社会には別の現象が進んでいる。スポーツをめぐる社会的消費とは、興奮という充実感の、どこまでも疑似的で代替的な経験である。これによって獲得する充実感とは自分の生を支えるものではなく、結局のところ再び空虚感に帰結し、さらなる消費へと無限ループに取り込まれていくことになる。さらに、社会の内部で繰り返される競争の増大化は、結果すなわち勝利の重要性を高めていく。このような現象は相乗効果となって、前述した近代スポーツのエトスの降格へとつながることになる。実際、商業的祭典の方向へ舵を切った1984年のロサンゼルスオリンピックを象徴として、それ以降のスポーツの展開そのものが近代スポーツのエトスの腐食を証明しているともいえる。竹内によれば、生物の中で唯一、暴力の制御本能を喪失した生物であったのが人間である（竹内1981：155）が、近代イデオロギーのなかでは、暴力を抑制することこそが人間的である、という信仰が成立していた。この矛盾が20世紀後半になると大きく口を開けることになったといえるだろう。私たちは、暴力への欲望と抑制の狭間で浮遊しはじめる自分自身を感じはじめ、暴力の合理的かつ制度内使用への圧力に、不満を蓄積していくことになる。すなわち、制度内暴力という期待を担っていたスポーツは、やがて機能不全を起こしはじめたといつてよい。

これが昨今のスポーツ暴力問題の根源に存在する。

（結果より参加することに意義を見出すという考え方の重要性が減少したこと）同時に、ルール範囲以内で荒々しくプレーし、成功を求めて違法の暴力を行使するという選手の傾向が増えた。要するに、ゲームにおいて暴力を手段として使う傾向が近年増えたということが先験的に成立するように思われる。・・・合理的暴力の隠然たる使用を促す競争的圧力の増大化は、同時に、公然たる権力、つまり、男性のスポーツ選手、女性のスポーツ選手が瞬間的に自制できなくなり、仕返しに相手を殴るという行動を誘発する。手段としての暴力の戦略的な使用がしばしばそのような自制心の喪失をもたらす引き金になるという事実はさらに、ひとつの種類暴力がどのようにして別の種類の暴力に急速に変化するかということを示してくれる。（ダニング1995：339-340、冒頭括弧内は筆者の補足である）

エリアスは暴力を社会システムの問題として語っている。すなわち「暴力の抑制は、「文明化された国家」の性格の優越性の徴候ではなく、その人種的、民族的構成の永遠の性格でもなく、より分化し、安定した暴力手段の社会的規制、それに対応する良心の形成に帰着した特殊な種類の社会的発展の諸相であるということを出させてくれる。明らかにこの種の社会的発展は逆行しうるのである」（エリアス1995：208）。もちろん現代においては、時代状況は変容しているけれど、文明化はそもそも社会的発展だったのか、というエリアスの指摘には再吟味の必要がある。また私たちにとって身体的自由を拡大してきたかという問いに答えるのは今も難しい。ある部分から暴力が極端に排除させられるとともに、別の部分に暴力が析出してくることは、いつの時代もありうるのだ。

しかし避けて通ることのできないことは、興奮を感じる身体とは、「生と死のリズムを直接経験する身体」（作田2003：279）なのであり、実存が意識されるのは、「個別の身体」にまわり

ついた“飼いならされていない”体験のなかにしかない、ということである。これは身体のもつ独特の位置づけから避けることができない。

2. 「不可能性の時代」の身体とスポーツ

大澤は第二次世界大戦後の日本の社会の型について、ほぼ20～25年の幅をもって3つの時代に分類している（大澤2014）。戦後の復興から全共闘運動の時代までをくくる「理想の時代」、連合赤軍事件からオウム事件の直前までみられる「虚構の時代」、オウム事件から後の私たちの「不可能性の時代」である。この著作の内容は豊かな広がりがあり、一言でまとめるわけにはいかない。しかし本論考の立場からの読み替えの一つをあえて表明するなら、理想の時代は近代的スポーツ理念への闘争の時代であり、虚構の時代はメディアの物語と政治の時代であり、そして不可能性の時代とは、身体性の争奪の時代である、と読んでも、あながち間違いではないだろう。実際、1964年の東京オリンピックは努力信仰と発展する社会の理想を追いかける時代を代表する出来事であったし、1984年のロサンゼルスオリンピックは、放映権とスポンサー料の高騰を誘発させ開催費をまかなう時代の本格的到来であり、虚構の時代の象徴のような出来事だった。そして、ドーピング問題が世界を駆け巡り、国内では暴力問題が繰り返し深刻さをみせるスポーツの現在は、近代以降人間の中に蓄積されてきた身体性にたいする葛藤が、その傷口を生々しく露わにしはじめた出来事群であるといってもよいだろう。

このような社会背景のもとに大澤は、オタクという不可能性の時代の主人を読み解いている。大澤は、オタクの身体が、身体の直接性からの撤退すなわちメディア空間への閉じこもりと、身体の直接性への回帰すなわち自分の感性への執着、との間に引き裂かれながらも、同時にそれらと共存させているさまを論じている。これは言い換えれば、閉塞した制度＝社会、からの身体の離別と、直接的な身体の興奮による生の確認、とに引き裂かれながらも共存させている現代人の状況そのものを代表している。そして加えて大澤は「身体の問題は他者性の問題である」（大澤2014：118）という。

マルセルによれば「身体性は存在と所有の緩衝地帯である」（マルセル1977：106）。すなわち、身体はその人間の所有物でもあり、同時に身体は生命の存在する場所でもある。所有物は意のままに自由に動かそうと操作を意図することができるが、存在は自由にはならない。この身体の二つの地帯は分裂したものだが、ただしこれらは時に、交換しあったり、葛藤したりする。現在の状況は、所有の圧力が高まるほどに、存在としての身体がそれに激しく葛藤している時代であるともいえよう。アスリートであればなおさら、所有し操作する身体と存在する身体とのほざまで、そのままならなさとの向き合っているはずである。この身体の亀裂について近代社会は無かったこととしてきたが、それは身体の中の他者性を隠蔽していたにすぎず、失われたわけではない。身体のままならなさとの付き合い、それがスポーツの場に象徴的にあらわされるのが現代であるといってもよい。そして大澤はこの亀裂が、激しく相互に双方を際立たせる状況になっているオタクの身体について、以下のように述べる。

一方では、われわれは＜他者＞へ魅かれ、＜他者＞を熱烈に欲望するが、他方では、われわれは＜他者＞に嫌悪を覚えており、それでもなお＜他者＞がわれわれに迫ってくるならば、・・・それを侵略的なものと感ずるだろう。（大澤2014：191）

この矛盾に満ちた関係性をどのように考えるべきだろう。私たちは他者を欲望しようが嫌悪しようが、いずれにしてもそれを排除することはできない。それは私たちの不可欠な一部であることには変わりないからである。少なくとも単純な合理性が作り出す物差しで普遍的なるものを政治的に析出させることには、限界があることを認めなければならぬだろう。ワイツゼッカーのいう「合理的なるもの不合理性」(ワイツゼッカー 2000: 282)の畏に、はまり続けることは避けなければならない。とはいえ、それは容易くはない。大澤も指摘するように、迫ってくる<他者>の脅威が、現代人の心を防衛的にかつ内向き志向に閉じ込めていく状況。それは個人のレベルから国家のレベルにまで拡大していることを、私たちは現代のリアリティとして知っている。しかもその先に未来が見通せないことも知っている。この袋小路から離脱するためには、異質なものの同士のこれほどの激しい引力と斥力が同時にひしめく動態を、私たちは様々な水準で引き受けなければならない。

この矛盾に満ちた必然を正面から引き受けている象徴的な場のひとつが、スポーツなのである。例をあげよう。

現代のスポーツの現場では、科学的トレーニングや医学的管理の手法がますます高度化し、ある程度までは確実に競技者の記録について、その可能性をかなりの精度で測ることができる。目的にたいする合理的トレーニングが徹底されることは今やアスリートの日常にもなっている。しかし面白いことに、スポーツの結果は必ずしも計算どおりにはいかないのだ。ここまで高度化した科学時代でさえ、能力の高い選手が思い通りに結果を出せないことも多いし、思わぬ伏兵が計算では考えられない記録を達成し栄光を手にもすることもある。むしろ計算通りにいかないところに、スポーツの面白さやドラマスポーツの価値一が担保されているといってもよい。これは私たちにとって、きわめて身近な事実である³。

ワイツゼッカーの語法にしたがえば、身体の内側に「不合理なるものの合理性」(ワイツゼッカー 2000: 162)を認めなければならない。「意味にみちた<不合理な>行動」が存在する。それは概念ではとらえきれない知覚のことであり、「人間的文化においても、現実についての無概念的知覚というものは、利害合理主義が知っているより遙かに大きな役割を演じている」(ワイツゼッカー 2000: 282)。これをスポーツの言葉に翻訳するならば、次のようになるだろう。アスリートは科学的合理性を理解し、それを利用したり依存したりしながらパフォーマンスの向上をめざす。しかしアスリートはそこに留まることはない。彼らはさらに、概念ではとらえきれない直接的な知覚、意識を超えた身体感覚をつかもうとする。私たちもアスリートも、データ予測とは異なる結果を説明するのに、調子の良し悪し、メンタルの強さ弱さ、などという言葉でしばしば漠然と、しかし饒舌に語る。そしてここで語られている内実は、合理的なものとは不合理なもの、意識と無意識、科学と感受性、などのあいだに作り出される不調和な関係への体勢についてなのである。この体勢がうまく獲得されたときの状態を、チクセントミハイは「フロー」(チクセントミハイ 1996)と呼んだ⁴。

³ オタクの身体とアスリートの身体を、同じものとして論じることに違和感を持つ場合があるかもしれない。しかし、一方で高度に科学的で人工的な空間(オタクにおいてはメディア空間であり、アスリートにおいてはトレーニング機器によって管理された空間)に閉じこもり、他方で身体の直接性(自分の感受性や興奮へのこだわり)を求め、という点では奇妙なほどこの二つの身体は酷似している。どちらも現代文化からもたらされた必然を背負っているといえよう。

⁴ フロー状態のとき、予測を超えた良いパフォーマンスへと結果する可能性が広がり、逆に、不合理性への対応が構築できないとき、予測どおりに結果できない可能性が広がるといってもよいだろう。フローの特徴は、第一に自意識の喪失、第二に統制への自己確信、の二つにあらわれるとチクセントミハイはいう。自意識の喪失とは、自己の喪失でもなければ意識の喪失でもない。正確には自己という意識の喪失である(よく集中するとき、自意識が失われることを私たちはよく知っている)。統制への自己確信

不可能性の時代におけるスポーツの意義は、したがって、次のようにまとめることができる。不可能性の時代においては、普遍性や統合への価値を認めることは難しく、私たちは<他者／異質なもの>との関係を拒否することができない。排除しながらも必要とするという他者との関係は、引力と斥力がせめぎ合うどこまでも不調和なものだが、この関係に私たちは体勢をつくれるのかどうか。この現代的課題に、現代人の先鋒として向き合っているのがアスリートたちなのであり、先鋒たちの挑戦のアーリーなこそスポーツの場なのだ。たとえアスリート自身がだれひとり自覚していなかったとしても。

確認しておくが、スポーツをつうじて先鋭的に繰り広げられるこの現代的課題にたいし、これを解決する制度は存在しない。「意識の統制は制度化できない」(チクセントミハイ1996:27)し、他者との関係はどこまでも予測不能だからである。しかし、他者との関係が予測不能であることは、不安でもあるが可能性だともいえ、さらにいえば、これこそ多元性・多様性ある社会の条件である。その意味においても、このスポーツの課題は当然ながら社会全体の課題へと直結していかざるをえない。アスリートの挑戦は、必然的に現代人全体への問いかけをとまなうことをも、忘れてはならない。

3. オリンピック神話の消失と東日本大震災

話がやや戻るが、スポーツがオリンピックという祭典によって美しく称揚せられるのには歴史的な理由があった。オリンピックの背後には、国際関係上深い傷となって残された戦争や紛争があったからである。そもそもクーベルタン男爵が最初に近代オリンピックを思いついた経緯からして、そこには普仏戦争の荒廃があった。その後もオリンピックの歴史は二つの世界大戦が色濃く影を落とした。だからこそ理想を語り続けなければならなかったし、それが必要とされていたともいえよう。近代オリンピックは、戦争によって心身ともに傷ついていた青少年の育成と福祉という教育的かつ社会政策的目的を掲げて男爵が発案したものだったが、国民国家体制強化の歴史のなかではナショナリズムの表現闘争の場としても期待されてきた。それらのなかには矛盾する要素があったとしても、オリンピックはそれらをソフトに融合させて十分に期待に応えてきたといえるだろう⁵。そしてこの基本構造は冷戦体制の崩壊の時期までは、かなり強力に維持されてきた。しかしそののち、戦争のトラウマの忘却によって、スポーツは、ナショナリズムと消費社会的権力の闘争場としての側面だけが肥大化し強化されていく。教育的かつ社会政策的機能は矮小化され、スポーツにまわりつく資本が編みだす勝利と栄光の物語＝メディア言説にとって代わられることになった。このことによって、クーベルタンのオリンピック思想は存続が困難になるのは⁶自然の成り行きなのだが、「平和」や「スポーツマンシップ」のスローガンだけは利用され、メディアの神話作用のなかに取り込まれていくことになった。

とは、自分の能力が挑戦的な活動をしているが、それは対処可能であることを疑わないことである(不安を持たないことはカオスへの瞬時の対処が適切になされる条件でもあることを、スポーツのあらゆる場面で私たちは知ることができる)。詳細は別稿(中江2013c)を参照のこと。

⁵ 内田は、1964年の東京オリンピックが、第二次世界大戦時に大規模な学徒動員が実施された記憶が塗りこめられている代々木を中心に開催されたことを指摘し、歴史的記憶の更新が見事に成功したことなどを論証している(内田2018)。

⁶ 現代の高度消費社会におけるオリンピックのメガイベント化によって、オリンピックが新たな歪みを抱え込む様相については、舛本(2002)が簡潔かつ十分にまとめている。

神話作用は社会的現実を物語言説によって人間学的に構築するものであり、メディアやこの構築の過程を媒介するものと考えられている。この場合、現実構築の過程は、群衆＝観客が〈人間の眼〉で現実をまなざし、観察し、鑑賞する社会過程に対応している。またそこには、メディアはそのような〈人間の眼〉を代替し、〈人間の眼〉を拡張するという前提が含まれている。しかし実際には、このような前提がみだされるとは限らず、メディアの導入によってむしろ〈人間の眼〉の同一性が変質し、破碎される可能性が拡大する。(内田2013：63)

いうまでもなくスポーツは、現代の神話を創出する格好の題材であり、ここには熱狂らしきものが常に再生産されており、またこの社会に象徴的な同一性を現出させるメディアとしても機能している。しかしここで内田が指摘するのは、そのような神話も消失する可能性があるということである。神話の消失という問題について内田は、メディアが神話創出の主体であることと同時に、メディアは神話に外在し冷静に記録する装置ともなることを指摘する。前者と後者のズレは神話への不信を噴出させ、同一性は粉碎されてしまうことがあることを示した(内田2013)。

また阿部は、希望という言葉でオリンピックの神話について整理している(阿部2018)。1964年の東京オリンピックは希望と発展の拡大を素直に信じていくことができた時代であるが、その後の虚構の時代のなかでは理想や希望が「いかようにでもあるこれから」として大量に生み出され消費されていったという。さらに不可能性の時代のなかでは、希望は反転し、「未来は「行くあてなきこれから」として陰鬱に受け止められるようになった」(阿部2018：206-207)。「希望への絶望」とでもいうべき不可能性の時代。このなかでオリンピックは「熱狂なき盛り上がり」をみせ、「希望があることを願う」シニシズムが蔓延する。そしてシニシズムは、異論や反論の発信を許さない窮屈な空気をつくりだす(阿部2018：209-210)。そこにあるのは、無関心が作り出す暴力の連鎖なのかもしれない。

内田や阿部が共通して示しているのは、努力の美しさと勝利の感動の物語をメディアが繰り返し発信する一方で、私たちの社会に広がる心理はその真逆の様相に進み、この乖離はいまのところ広がるばかりという状況だ。乖離したその双方はそれぞれに貧困化の度を高めていく。つまり、メディアの物語が繰り返す極端な盛り上げはその中身を次第にステレオタイプ化していき、その対極では、スポーツ神話は人々のなかであつという間に消失させられ希望は廃れていく。この繰り返しから生まれるやり場のなさには出口が見つからないのである。

このような状況に至った原因を探ることは複雑だが、出口を見失わせている原因の一つは、オリンピックの言説のなかに東日本大震災の深い傷口を、無意識にであれ意識的にであれ、完全に無視していることである⁷。近代オリンピック大会の背景にヨーロッパにおける戦争の荒廃があったように、希望の前提には困難や傷口がある。これを乗り越えようとするからこそ、希望はその根をもち、意味を持つことができるのである。しかし虚構の時代には、希望は乱舞されつつもその根は強制的に忘却されていき、不可能性の時代に突入するとますますその根を回復することができないでいる。東京オリンピック2020の誘致運動の前提には東日本大震災が存在した。にもかかわらず、安倍首相のIOC総会での東京オリンピック誘致のための演説で放った「アンダーコントロール」⁸の言葉は、私たちの態度を震災被害の現実からシニカルに、かつ確実に遊離させる理由をつくったことは否定できない。メディアに踊った安倍の言説はまさに、内田のいう意味でも阿部のいう意味でも、神話を粉碎するものであり、おそらく話者の意図とは逆に、本当は誰も

⁷ 東日本大震災とスポーツについては別稿(中江2013a)を参照のこと。

⁸ 2013年9月7日ブエノスアイレスで開かれたIOC総会における安倍晋三首相の東京誘致演説。フクシマは既に完全な制御下にあるというフェイクを堂々と言い放った。

が知っていた国家的欺瞞への疑義を確信に変えてしまったといえるだろう。

東日本大震災は、津波被害にしても原子力発電所の事故にしても、世界的に拡大している科学万能信仰に基礎づけられた現代文化にとっての、苛烈なスキャンダルであった。合理性の時代とされた社会のなかに、そこに内在していた不合理が大きな裂け目をあらわにした事件でもあった。しかし本論文の前節を受けて考えるならば、不可能性の時代にこそこの不合理は隠蔽すべきものではなく付き合うべきものはずであり、しかもそれはまさに不可能性の時代のスポーツに課された挑戦ではなかっただろうか。

しかしここでも再びメディアの神話作用が、事態に難しさを作り出している。「他者の苦痛へのまなざしが主題である限り、「われわれ」ということばは自明のものとして使われてはならない」(ソントグ2004:5-6)。ソントグは、メディアがグローバルに発達した現代であればあるほど、私たちは他者の痛みに関心でいられるし、そのことに躊躇を感じないで過ごせることを論じている。合理性のなかの矛盾も、フィクションも、スポーツも、同じスクリーンのなかで同列になってしまう。そこにある意味に潜り込むことは拒絶されていく。そして、その事実自体が、全世界を巻き込んだ格差問題の結果であり、無関心が作り出す断絶こそ「相違することへの自由」というスローガンが流通する根拠にもなっている、という厳しい逆説をあきらかにしている。痛みの当事者として考えてみれば誰でもわかるだろうことは、「自分の苦しみが他の誰かの苦しみと比較されるのは耐え難いこと」(ソントグ2004:113)ということだ。メディアを経由することによってあらゆるものが一般化されることによりもたらされる暴力性は、痛みにおいて特に顕著にあらわれる。他者の深い痛みをまなざすことは、「弱さに対して自分を鍛えること、自分をより強く麻痺させること、どうしようもないものの存在を認めること」(ソントグ2004:98)を結果させ、これによって、まなざす側に立つ人間に密やかな安堵と喜びを与えていく。この密やかな喜びが、痛みとともに生きる人びとや痛みに立ち向かうことから、世界を速やかに後退させてしまうというのだ。

このような希望の無いシニシズムにたいしても、スポーツを対峙させてみよう。

R.セネットは、誰の悪意にもよらず自然のままに、異質性を排除し、高度な格差社会を支える現代の「便利な」世界のなかで、そこに生活する人間の身体は、感受性を剥奪される方向に変容すると論じた(Sennett1994)。しかもその世界のなかで、剥奪される感受性のうち最も徹底的に剥奪されるのは、触覚である。これを「触ることへの恐怖」とセネットは言う。逆に言えば、触覚が拒否するという体験の対象こそが「他者」でもある。触覚を感じる場合、自分の身体が今ここに存在し、異質なものが今ここに存在することを認めざるを得ないからである(Sennett1994:212-251, 376)。時間や空間にさえ抵抗を感じさせない高度情報社会のなかで、触覚はある意味でスキャンダラスなものとして登場するといってもよい⁹。ところが、スポーツは、「今ここにある身体」の触覚ないし触覚への強い想像力を抜きには、成立しない。ここに、他者を確認することが前提として在る装置としてのスポーツの価値があらためて浮上してくるといえよう。

メディアコンテンツとして高い価値を与えられているスポーツではあるが、その一方で、そのスポーツという体験のなかでは、失われがちな触覚を回復して、実際に他者の身体の確認し合うという内実もある。憎み合う民族同士でもスポーツの対戦ができるのは、それが遊びであり擬制であるからだが、そこではじめて確認しあえる他者がいるのだ。もちろん、アスリートの身体で起こっている他者との関係は、事実としては東日本大震災などの社会的課題とは直接関係はない。しかしスポーツが、メディアを通じて社会的経験として肥大化し影響力を高めている今

⁹ eスポーツが今後どのような文化に育つのかについて論じるには、現在ではまだ時期尚早である。

日、アスリート以外の、スポーツスペクテイターである私たちの全体が、スポーツ現象の意味を読み替え、スポーツの価値を創造する主体となる可能性を否定することなど、どうしてできるだろうか。

4. 異物／他者とともに在る身体——リズムの哲学

養老（1996）は西洋と日本の身体観を比較するために双方の哲学史を手掛かりにしながら、次のように述べる。

西洋ふうの主客は、人間対自然の意味を大きく含んでいたらしい。すなわち、「神の似姿としての人間の理性」対「神の創造した客観世界」である。・・・ただその文脈は、この国ではすっかり異なってしまう。なぜならとくにここでは、創造者たる神が不在だからである。そのうえ今では、まわりに存在するのは人工社会、すなわち脳化社会のみになった。そのため、この主客の軸は、現代の日本ではむしろ、自他という軸に変わっている。したがって、科学における客観性も、「他人が認めるもの、評価するもの」に変わった。なぜならすべてが人工化したからである。人間は大自然に住まうのではなく、人工社会に住む。（養老1996：35）

現在では西洋もすでに十分に人工社会化されており、高度情報化社会とは洋の東西を問わず、客観性の伝統的/キリスト教的根拠を失っている。西洋の伝統的な身体観は養老のいうように、すでに時代遅れであろう。それに代わって、自他の軸が重要性をもつ社会、すなわち社会性が重要になることは明らかである。ところが肝心な自他の軸、あるいは自他の区別ということになると、私たちは複雑で曖昧な世界に迷い込む。自他の区別ないし自他の軸というもの自体が、時代にとって常にメインアジェンダになるのが現代だと言っても良い。

実際、自分の身体が感じているものを精査しても、それが身体の内現象か外の現象なのかを見分けるのは難しいからである。たとえば、「同一の生理的肉体の内でも、瞳孔の反射的な拡張などはリズムを持たず、身体行動と共鳴する可能性はありえないから、これは純粋な生理的肉体、身体外部に広がる物理的自然の一部だとしか言いようがない」（山崎2018：71）。身体の一部にサイボーグ技術を組み入れることが珍しくなくなり、身体内部にすら非親和的な他者を包摂することが日常にある現在においては、なおさらであろう。パラアスリートの身体はまさにその象徴である。しかしこれは極端で特別なものではない。私たちの身体と医療技術が生活に不可分である以上、私たちの身体でもあるのだ。

また逆に、身体内部に他者を抱えこむばかりではなく、身体外部にも自分の拡大された存在を見出すこともある。たとえばコンピューターによって管理される現代の社会とは、なにかがあるいはだれかが他者であるという感覚を回避する技術によって網羅された世界と言い換えることができる。人々は場所や時間から解放され、人格が情報や記号やメッセージというフェーズに翻訳され、カテゴリー化されていく。そこにおいて、生物学的な身体の境界を自他の境界とすることにあまり意味はない¹⁰。「逆に生理的肉体としては区別される他人の身体でも、ともに同じり

¹⁰ スポーツの現場において、何が自然であるかの基準が揺らぎ、問われる事態が続いている。山岳トレーニングや低酸素呼吸器をつけた人体改造はドーピングには問われない。しかし北京オリンピックの出場を目指した義足のランナー、ピストリウスは、IAAF（国際陸上競技連盟）によって「他選手より有利

ズムで踊って完全な共感 (empathy) が成立されれば、その瞬間だけは自他の相違はなくなったというべきだろう。一般に身体の内外部を区切るのは固定的な外郭ではなく、リズムの共鳴の強弱という漸層的な変化だと考えられるのである」(山崎2018:71)。

山崎は、変動が激しく他者との共存が運命づけられている時代において、人格とは、客観的に区切ることが可能な実態として存在するのではなく、むしろ「リズムの輻輳としての「私」」(山崎2018:210)としてしか存在しなくなったと論じた。異質なものの同士の引力と斥力が同時にひしめく動態について本論でも前述してきたが、私たちはその動態を引き受ける場合、具体的には、他者との関係にリズムを作ることによって具体的に可能になるといってよいだろう。引力と斥力がどちらも排除できないのが他者との関係であるなら、それを継続するには関係のなかにリズムを取り入れるしかないと言い替えてもよい。「他者との関係が予測不能であることと、その不能性を引き受けることは、多元性・多様性ある社会の条件である」、と前述したが、遊びのなかに自由を許し合いつつも、わずかな同調を作り出し楽しみに結び付けていく装置—リズム—は、予測不能性を引き受けるためのものでもある。鷺田は「身体性は緊張と弛緩の緩衝地帯である」(鷺田2011:178)であるといったが、リズムを感じとり発信する現場こそが身体であることを示している。

身体の社会学者である亀山は、瞬間瞬間に人間の予想を超えたところで生み出される異物ないし他者のリズムをみずからの身体で受け止め、そこにつねに新しい関係を生成していく身体を指して、「錯綜身体」(亀山2012)という概念であらわした。この錯綜身体は、「あらゆる対象(他者)と一体化して融合するという性格をもって」(括弧内筆者)るが、しかし「他者とはどんなに一体化によって融合をはかっても、常に拒絶して他なるものとしての差異を生み出す源泉のことであり」(亀山2012:62)。とすると、錯綜身体とは、自己と他者との間でリズムする身体であり、かつ、他者の存在によってこそ自己をよりよく確認する身体のことである。そしてそのリズムは、自分の身体の中でも成功させる必要があるし、ゲームの対戦相手や自分のチームメイトとの間でも交換され、共振を広げていけるかどうか、その勝負はスポーツにいつもついて回る。

そこで展開されるリズムは、一回性のものであり、常にユニークなものである。錯綜身体が関係を生成していこうとする他者は、常に個別的な他者なのであり、ミードのいう「一般的な他者」ではない。しかし「一般的な他者」なるものが虚実に包まれて個人の実存を支えにくくなっている現代においては、「一般的な他者」ではなく、むしろ「個別的な他者」の再評価が求められるともいえよう。多様性のある世界の構築とは、個別的な他者の発見、他者とのリズム的關係の構築、さらにその關係の社会的拡散をもって、想像していくほかないからである。これはもはやスポーツという枠を超える社会的なテーマとなるので、高揚する気持ちを抑え、ここではこれ以上論じないこととする。

さてこのような身体を想像するなら、わかりやすい事例はパラアスリートの身体である。彼らの身体は、欠損のある身体を生きているか、あるいはそれを補完する道具を身にまとい生きてい

になる人工装置の使用」を理由に出場が認められなかった。その後、スポーツ仲裁裁判所での審議に持ち込まれ、結果「義足による利益が科学的に証明できない」という理由で予選会での出場は認められた(しかしオリンピック出場は無かった)。別のケースでは、ドイツ陸連は、ドイツの国内競技会で義足の選手が優勝した際、義足が有利に働いたとしてこの選手を欧州選手権代表から外した。また、国際陸連は「義足が有利に働くことはあり得ない」(テクニカルドーピングではない)ことを選手自身が証明することを条件として、リオオリンピックの出場資格を認めることに決定した(朝日新聞、2016年1月16日朝刊、6月10日朝刊、高橋2017)。このとき、義足はなぜ人体ではないのか、義足はなぜ健常者の足より劣っていなければならないのか、低酸素に耐えうるよう科学的に改造された心臓はドーピングではないのか、については議論されることはなかった。人間の身体とは何かについては、現代という時代に合った社会学的議論が必要である。

る。ここで断っておきたいが、「欠損」という言い方はその言葉自体が激しく厳しい表現だ。しかし、あらゆる人間は完全ではないことを常識とするなら、言い換えれば、神の創造した西洋的身体理想という完全性の呪縛から脱出するならば、むしろその不完全さを正面から引き受けている点でパラアスリートは私たちの時代の前衛的位置にいる。身体はだれひとり同じでないことや、そこにある欠損もだれひとり同じではないこと。それらは常識だが、しかし私たちは近代的な平等観のためにそんな当り前に気づかないふりをしてきた。この欺瞞をはっきりと暴いてくれるのが、パラアスリートの身体なのである。彼らは自分の身体が要求する自分独自のリズムとバランスを、まず理解し、実現していかなければならない。またそこに補助的な道具があるなら、その道具あるいは技術という、生体ではない異物を生体の中に取り込むために、やはりそれぞれに異なるリズムとバランスを体得していかなければならない。それぞれの異なるリズムとバランスをユニークに実現しているパラアスリート個人が、今度は集団で協力し合ったり補いあったりしながらチームとなるとき、そこに共感と調和を成功裏に作り出すことがいかに奇跡的なことか、想像に難くない。「パフォーマンスは敵・味方のリズムの取り合い」（亀山2012：249）であり、それこそが勝利への接近なのである。このような生の実践が、どんなに私たち全体にとってのモデルとなることだろうか。

私たちはスポーツの「競技という枠組み」についても、示唆を与えられる。他者との接触の舞台である競技をかたちにしていくための制度（競技ルール）も、単純ではない。あらゆるスポーツ（パラであるか否かにかかわらず）に共通することであるが、何が平等なのか、何を争うべき尺度にするのか、という考えそのものがすでに議論の対象である。ルールの制定にはそのルールが公平だと考える理由も必要であるが、普段それは問われることなく、所与のものとして競技はおこなわれていく。しかしパラスポーツでは、競技のルール作りそのものが競技を規定し結果にも影響をもたらすということが、目に見えやすい。ルールに内在する価値意識の正当性について考え向き合うという社会的行為が、自覚的におこなわれることになる。

競い合いと均衡が同時に存立しているところにおいては、競争しあっている個（体）のあいだの平等ということは、より強き者たちによるより弱き者たちの殲滅と全く同じように、＜不自然な＞ことなのである。それ故に、人間たちの間の平等は、自然的なるものではなく、それが可能となるためにはなんらかの道徳的要請といったものを必需とするひとつの業績であると、私はテーゼを立てる。（ワイツゼッカー 2000：334）

「より速く、より高く、より強く」というオリンピックのモットーは、発展や拡大を無邪気に信じることができた近代世界が要請する道徳に合致していたからこそ、意味があった。しかしこれは実に単純に過ぎて、もはや近代を卒業した場所から新たに意味づけられるパラスポーツには適合的ではない。これが競技である以上、そこには、結果があらかじめ決定されないための平等という仕掛けが求められる。いままでのスポーツでは、それは西洋的身体観と近代道徳に裏付けられた、わかりやすい平等であったが、これからのスポーツはそこから離陸しなければならないだろう。少なくとも現在では、平等とは自由の中での平等のことであり、自由とは相違することへの自由なのである。

ちなみに、亀山は、リズムをとる行為が錯綜身体と他者とのあいだでつくられる以上、そのリズムとは「間合い」の取り方のことだ（亀山2012：77）、という。また、山崎は、世界でもっとも古くからリズムを思考の対象とし研究してきたのは日本なのであり、世界で最も早い先駆的なリズム論は世阿弥の『風姿花伝』の序破急であるという（山崎2018：18）。だからといって日本

文化を称揚するつもりはないが、ただ、間合いや呼吸をつうじて身体や共同性に深く洞察を与えていく歴史が存在したことは事実であろう。西洋の身体観の歴史から遠く離れた場所で培ってきたもうひとつの身体文化を、オリンピック2020を契機に捉えなおしてみるの悪くはない。

5. パラリンピックという夢

日本パラリンピック委員会は、パラリンピックの意義として、以下のような文章を載せている。

様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑むパラリンピックは、多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場です。すなわち、共生社会を具現化するための重要なヒントが詰まっている大会です。また、社会の中にあるバリアを減らしていくことの必要性や、発想の転換が必要であることにも気づかせてくれます。(日本パラリンピック委員会2018Web)

ここでパラスポーツや障害者スポーツの世界に深入りすることはできないが、この耳障りの良い文章を吟味することをもって論を閉じたいと思う。

パラスポーツあるいはパラリンピック教育は、ヨーロッパにおいては第一次世界大戦後に大量の身体障害者を生み出してしまったことや、日本においてはリハビリテーションの一環として生まれてきたことなどを、その歴史的背景として進められてきた。これを踏まえるなら、パラスポーツがいわゆるノーマライゼーションをめざしてきたことは、必然的である。つまり「障害がない人と同じ生活条件をつくり出すため」なのであり、これは社会福祉の全領域に共通するものとして受け入れられ尊重されてきた。そして、障害の多様性が認識されるようになり、それを補助する道具が広まるにつれて、アダプティブ・スポーツ (adaptive sports) すなわち、「それぞれの身体状況に合わせたスポーツ」という言い方もされるようになった。道具やルールを合わせてスポーツの形を変更していこうという機運が90年代以降は高まってきたといえよう。

しかし本論の論旨をふまえ、あらためて現在のパラスポーツを振り返るならば、障害者スポーツがいわゆる近代的価値への同化という昔ながらの夢から脱出していないのではないのかという心配がぬぐえない。そこで同化 (assimilation) ではなく、包摂 (inclusion) という言葉が使われていたとしても、である (高橋2017)。何ができるか、できないことではなくできることに注目していこうとするパラスポーツの理念は、逆照射するなら、もしかすると、できないことから注目をそらし、できることの優越性のみを競う近代的業績主義の影を追いかけることになっていないだろうか。競技の平等性を創出するために、障害の重さに従ったクラスのなかに障害者を細分化することは、差別化に繋がってはいないか。障害者の側からも、障害者と健常者との壁をつくってはいないか。もちろん、あらゆる身体的な補助道具は身体の完全な機能をめざして技術開発されるのだが、その技術開発現場の価値観に障害者の身体観が取り込まれ、巻き込まれていないだろうか。パラリンピックの意義として掲げられている、公正な機会、ないし、バリアを減らしていくことなどは、障害者スポーツの価値観として掲げながらも、障害者の理想としてしまっていないだろうか。連鎖反応のように心配が湧き上がる。多元主義が意識的に叫ばれるようになり近代のオルタナティブとして障害が語られるようになってから以降でも、当事者たちやスポーツの研究者たちのあいだで、可能性の時代の言説が繰り返されていると思えることが多々ある。ここにある障害者スポーツの複雑なパラドックスは高橋 (2017) が整理

しており、あらためて論じない。

しかしそれでも、身体論の立場からパラスポーツの可能性を論じることは諦めないでおこう。

さて、理想の時代や理想の残影を追いかけた虚構の時代においては、近代的なエトスにふさわしい頑張る身体や勝利する身体が求められた。では不可能性の時代に求められる身体、言い換えれば、高度な情報化社会のなかで求められる身体とは何だろうか。亀山は、錯綜身体がつくりだす身体感覚のうち、代表的なのは「滑走感覚」であるという。自分と他者、自分と異物とのあいだで、そのどちらにも一体化せず、リズムのなかにそれぞれへの関係性をうまく作り上げることができたとき、その達成感は「うまく滑ることができた」という感覚としてあらわれる（亀山2012：64-69）。ところで滑走感覚とはそのままスポーツの言葉である。スキーやスケートやサーフィンなど、予想外に変化し続ける自然と、自分の身体の拡張であり異物でもある道具と、自分の身体。それらの複雑な「ズレ」にうまく乗れた、と感じる、その感覚のことである。考えてみれば、不可能性の時代の私たちにとって最も身近な感覚こそ「ズレ」なのかもしれない。

情報化社会は現実と虚偽とがその明確な区別を失う社会であり、さまざまなイメージのなかで生きざるを得ない社会である。しかもイメージは実在とのズレを増幅させながら流通する。このズレの増幅が私たちの滑走感覚をより身近にしている。ネットサーフィンという言葉は象徴的だ。そこでは、身体が滑っているのではなく知覚が滑っているのだが、情報化された生活の基礎にズレの感覚がなければこの言葉は生まれないであろう。しかし、ズレはあまりに乖離が大きくなると、滑るのではなく破壊されてしてしまう。そのぎりぎりの感覚を、私たちはスポーツメディアを通じた疑似的な体験として楽しんでいるし、遊園地やイベント会場などでは、危うさを増すジェットコースターやバンジージャンプを通じて、楽しんでいるのではないか。ズレのうえでこそ成り立つ滑走感覚は、概念や言語ではうまく説明ができないので、身に着けるためには身体そのものを多少ズレの上に置いて、やってみるしかない。身体性は、ここでもまた再興することが求められている。多様な生き方や身体のあいだを、いかに滑走し、リズムをつくり、しかもそれらを共振させていくことができるか。これは楽しい、新しい時代のスポーツの価値にはならないだろうか。

最後に、そもそもの「スポーツ」の意味をここで確認しておきたい。

「スポーツ」(sport)の語源は、ラテン語のdeportareに由来するというのが定説である。接頭語のde-はawayを意味し、portareはcarryを意味し、その結合語は、「運び去る、運搬する、輸送する、追放する」を意味した。古フランス語のdeporter、desporterが示すように、物理的・空間的な次元から「気分を転じさせる、楽しませる、喜ばせる」という意味や、再起的用法により「やめる、耐える、遊び、気晴らしによって元気を回復する、時をやり過ごす」というように、次第に内面的、精神的な次元の移動、転換、変化を原理とする喜びや楽しみを表現することになりはじめた。(阿部2009：5)

「game」という用語は、喜びを意味する古代サクソン語の「gamen」から由来するといわれる。語源的にこの「gamen」は、ゴート語の中性名詞「gaman」と同一の性格を持っていた。この言葉はtogetherを意味する接頭語ga-と人間を意味するmanとの合成語で、参加、親しい交わり(集まり)を意味した。「sport」がある場所(状態)から異なる場所(状態)への移動、転換によってもたらされる喜びを原理とする言葉なら、「game」は人間の集合、共同によってもたらされる喜びを原理とする言葉であった。(阿部2009：6)

これを踏まえるなら、時代の転換期にスポーツがいわばバブルといってよいほどの熱い注目をあび、集合的歓喜を求める社会心理も、当然のことといえるだろう。また、スポーツには競争（闘争）と勝利の褒章としての「資本」などというものは含意されていなかったことを確かめたい。むしろそれは近代と産業社会のなかで、興奮をよりリアルに高めるために導入されたにすぎない。今、近代的、産業社会的イデオロギーが機能しなくなっている時代においては、もはやこの近代的なバイアスを一度取り除き、新たに私たちにとってのスポーツないしオリンピックの意味を問い直すことが必要であろう。オリンピックは英語ではOlympic Gamesであり、東京オリンピック2020は、The Tokyo 2020 Gamesということ思い出しておこう。スポーツやゲームにとって、順位をつけることも集合的歓喜も、相互に必要なものかもしれないが、より本質的なのは後者である。

鷺田は他者について以下のように言う。

他者とはわたしがそれに向かって語る者であり、またわたしに向かって語りかけてくる者である。西欧の言語において、「責任」(responsibility, Verantwoordelijkheid) ということばが「応える」(respond, antworten) という動詞に由来するというのは、興味深い事実である。他者への責任がそこでは、他者に応える義務として受け止められているのである（鷺田2011：116）。

スポーツは、他者の存在を意識し、自分の生（身体）の具体性を確認し、かつ他者へ応える実践をささえる場となりうる¹¹。共感が、とてもはかなく、かつ様々な内実が多様にあるとしても、その瞬間は他者との間になんらかのコミュニケーションが成り立っており、そこにあるズレを滑走しているともいえるだろう。R.ベラーは、多様性ある社会でいかにして民主主義が可能かを問いかける著書のなかで「民主主義とは注意を払うことである」（ベラー 2000:266）と述べた。民主主義とは状態を指すのではなく、関係性そのもののダイナミクスのなかにこそ存在するというのだ。ややもすると異質性を完全に排除ないし無視して進もうとする高度情報化社会のなかで、身体的な個別的な存在を一般性のなかに溶解させることなく、多様な応答の継続を、個別的で異質な社会関係の絶えざる生成を、世界にあふれるよう育てていくことこそが、新しい時代の責任であり挑戦であることを忘れまい。

パラリンピックはもう一つのオリンピック、なのではない。ほんとうは、パラリンピックのなかに、オリンピックが包摂されていくのだ——パラリンピックという私たちの夢である。

引用文献

- 阿部生雄（2009）『近代スポーツマンシップの誕生と成長』筑波大学出版会
 阿部潔（2018）「『2020』から『1964』へー東京オリンピックをめぐる〈希望〉の現在」小路田・井上・石坂編著『〈ニッポン〉のオリンピック』青弓社
 Bellah, R. N., Madsen, R., Sullivan, W. M., Swidler, A., Tipton, S. M., (1991), *The Good Society*, Alfred A. Knopf. New York. (ベラー他 2000 中村訳『善い社会』みすず書房)
 Caillois, Roger, *L'Homme et le Sacre*, (1950) Gallimard, (カイヨワ1994『人間と聖なるもの』せり

¹¹ スポーツは基本的人権や広義の福祉のありかたと深く関わるものとして、つねに時代と共に考え続ける必要がある。（内海2015）

- か書房)
- ダニング、エリック (1995) 「スポーツにおける社会的結合と暴力」、Elias, Norbert., and Dunning, Eric, (1986), *Quest and Excitement*, Oxford, Basil Blackwell、(エリアス・ダニング、1995『スポーツと文明化—興奮の探求』法政大学出版会)。
- エリアス、ノルベルト (1995) 「スポーツと暴力に関する論文」、Elias, Norbert., and Dunning, Eric, (1986), *Quest and Excitement*, Oxford, Basil Blackwell、(エリアス・ダニング、1995『スポーツと文明化—興奮の探求』法政大学出版会)。
- Foucault, Michiel, (1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard (フーコー 1977 田村訳『監獄の誕生』新潮社)
- 亀山佳明 (2012) 『生成する身体社会学』世界思想社
- Marcel, Gabriel., (1935) *Etre et Avoir*, 1935, Paris, Aubier, (マルセル 1977、渡辺・広瀬訳『存在と所有』理想社)
- 舛本直文 (2002) 「浮遊する「オリビズム」」『現代スポーツ評論』7号
- 中江桂子 (2013a) 「現代における身体文化の意義」日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』創文企画
- (2013b) 「身体と学び：近代の陥穽とは何か—身体文化の歴史社会学」『スポーツ社会学研究』第21巻2号、日本スポーツ社会学会
- (2013c) 「理解と共感の技法：わざの文化を手掛かりとして」『国際行動学研究』第8巻、国際行動学会
- 日本パラリンピック委員会 (2018/10/20) <http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/index.html>
- 大澤真幸 (2014) 『不可能性の時代』岩波書店
- Sennett, Richard (1994), *Flesh and Stone*, Norton, New York
- Sontag, S., (2003) *Regarding the Pain of Others*, Farrar, New York, (ソントグ 2004、北條訳『他者の苦痛へのまなざし』みすず書房)
- 高橋豪仁 (2017) 「パラリンピック教育に関する一考察—障害者者スポーツからの学び」『次世代教員養成センター研究紀要』第3巻
- 内海和雄 (2015) 『スポーツと人権・福祉—「スポーツ基本法」の処方箋』創文企画
- 内田隆三 (2013) 「スポーツの夢と社会過程」日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』創文企画
- (2018) 「成長の時代の幻影—精神史としての東京オリンピック」小路田・井上・石坂編『ニッポンのオリンピック』青弓社
- 養老孟司 (1996) 『日本人の身体観の歴史』法蔵館
- 鷺田清一 (2011) 『悲鳴をあげる身体』PHP研究所
- Weizsacker, C. F. V. (1977), *Der Garten des Menschlichen*, Carl Hanser Verlag. ワイツゼッカー、C.F.V., 2000 山辺訳『人間的なるものの庭』法政大学出版会
- 山崎正和 (2018) 『リズムの哲学ノート』中央公論新社